

氏名	佐藤 洋輔			
学位の種類	博士（心理学）			
学位記番号	博甲第 9592 号			
学位授与年月	令和 2 年 3 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	LGB の精神的健康とその関連要因についての心理学的 研究			
主査	筑波大学教授	博士（心理学）	沢宮	容子
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	濱口	佳和
副査	筑波大学助教	博士（心理学）	大谷	保和
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川	充

論文の内容の要旨

佐藤洋輔氏の博士学位論文は、性的指向のマイノリティであるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（以下、LGB とする）の精神的健康とその関連要因について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的） 著者は、以下の 3 つの目的を設定して研究を行なった。第一に、異性愛者と共通して精神的健康に影響をおよぼす一般心理過程の視点から、対人関係や認知的処理の要因について LGB と異性愛者の比較検討をした。第二に、社会的スティグマがもたらす影響に焦点を当てたマイノリティ・ストレスの視点から、LGB が体験するライフイベントと、異性愛者の LGB に対する態度について検討した。そして第三に、LGB の精神的健康を維持する要因として LGB アイデンティティに焦点を当て、LGB アイデンティティを構成する複数の要素が精神的健康とどのような関連を示すかについて検討した。

（対象と方法） 著者は、上記の 3 つの目的を達成するため、4 つの研究を実施した。研究 1 において、LGB の大学生・大学院生 205 名、異性愛者の大学生・大学院生 1,125 名に対して質問紙調査・web 調査を実施し、対人関係要因（対人ストレス・ソーシャルサポート）、認知的処理（反すう）、精神的健康（抑うつ・不安）について LGB と異性愛者の傾向を比較し、さらに変数間の相互関係について検討を行なった。研究 2 において、LGB の大学生・大学院生 12 名に対して半構造化面接を実施し、LGB が体験する性的指向と関連したライフイベントについて尋ねた。面接から得られた語りについては、体験をいくつかのグループに分類したのち、体験の相互関係を検討した。研究 3 において、異性愛者の大学生 356 名に対して質問紙調査を実施し、LGB に対する態度を性別・セクシュアリティについて比較したのち、LGB に対する態度と心理・社会的要因の関連について検討した。研究 4 において、Mohr & Kendra (2011) の開発した Lesbian, Gay, and Bisexual Identity Scale の日本語版を作成したのち、LGB167 名に対して web 調査を実施して日本語版 LGB アイデンティティ・スケールの信頼性・妥当性を検証した。

（結果） 研究 1 では、LGB は異性愛者よりも対人ストレス、反すうの得点が高く、家族から得られ

るソーシャルサポートの得点が低いことが示された。さらに、これらの要因について共分散構造分析を行なった結果、性的指向がLGBであることが対人ストレスと家族から得られるソーシャルサポートに影響をおよぼし、また対人ストレス・家族から得られるソーシャルサポートは反すうを介して精神的健康に影響を与えることが示唆された。研究2では、KJ法を援用して分類した項目について数量化iii類とクラスター分析を実施した結果、「アイデンティティの受容度」と「体験の共通性」の2軸、および性的指向と関連した体験を示す「異性愛への同調・異性愛者的振る舞い」、「同性愛・両性愛的感情の肯定」、「内在化された同性愛嫌悪」、「偏見やスティグマの意識と、拒絶に対する恐れ」、「バイセクシュアル固有の体験」、「LGBアイデンティティの受容・確立」という6つのクラスターが抽出された。研究3ではLGBに対する態度は女性よりも男性の方が否定的であることが示され、またゲイに対する態度はレズビアンやバイセクシュアルの女性に対する態度よりも否定的であることが示唆された。また、男性においてLGBに対する態度は性役割への態度や、同性愛に関する知識、LGBの友人の数と関連することが示された。研究4では日本語版LGBアイデンティティ・スケールの信頼性・妥当性が確認され、8つのアイデンティティの次元が確認された。またこれらの次元は、精神的健康の各指標に対してそれぞれ異なる関連を持つことが示唆された。

(考察) 著者は、本研究の3つの目的についてそれぞれ考察を行なった。第一に、一般心理過程については、LGBが異性愛者よりもストレスフルな対人関係を経験していること、そして対人関係要因の差違がLGBのネガティブな認知的処理の働きを促進することで、精神的健康に影響をおよぼすプロセスが実証された。第二に、マイノリティ・ストレスでは、LGBと異性愛者の両方の視点から検討を行なった結果、LGBが「内在化された同性愛嫌悪」や「他者から拒絶されることへの心配」といったマイノリティ・ストレスを経験していることや、LGBが体験するライフイベントはそのアイデンティティの受容度によって異なることが示唆された。また数量化iii類・クラスター分析により得られたクラスターからは、LGBのアイデンティティ発達を説明する古典的モデルと同様のクラスターの布置が確認された。さらにLGBの中でもバイセクシュアルはレズビアンやゲイとは異なる種類の体験をしていることが明らかとなった。一方で異性愛者に関する検討では、ゲイがレズビアンやバイセクシュアルと比べて偏見を抱かれやすいことが推察された。そしてその背景には異性愛者の有する同性愛についての知識や、性役割に対する態度が影響をおよぼしている可能性が示され、男性のLGBに対するスティグマを低減するためには男女の性役割を含めた多様性教育の実施、当事者と交流する機会を設けることが有効であると考えられた。第三に、LGBアイデンティティについては、日本語版LGBアイデンティティ・スケールが一定の信頼性・妥当性を有することが確認され、LGBアイデンティティを構成する要素として他者からの受容に対する懸念、アイデンティティの秘匿、アイデンティティのゆらぎ、内在化された同性愛嫌悪、困難なプロセス、アイデンティティへの優越感、アイデンティティの重要性、アイデンティティの肯定の8次元が示された。さらに、精神的健康との関連についてはアイデンティティの重要性を除いた7つの次元が人生満足度、状態自尊感情、抑うつ、ネガティブ感情に対してそれぞれ異なる影響を与えていた。特にアイデンティティの肯定は多くの精神的不健康の指標に対して負の影響を与えており、LGBアイデンティティにはスティグマに起因するネガティブな側面だけでなく、精神的健康を改善しうるポジティブな側面が存在することが示唆された。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、LGBの精神的健康について、一般心理過程、マイノリティ・ストレス、およびLGBアイデンティティの各視点から、実証的に検討を行ったものであり、LGBの精神的健康に関する総合的な知見を提供することができたことの学問的意義は大きい。また、一般心理過程、マイノリティ・ストレス、およびLGBアイデンティティの各次元において、支援のターゲットとなる複数の要因も提示することができ、臨床的な意義も大きいと評価できる。

令和2年1月9日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。